

近畿における木製品の用材選択

黒須 亜希子

1. はじめに

原始時代の人々が木で道具を作る際、その用途にあわせて樹種を選択したことは早くから指摘されている。1936年に調査が行われ、1943年に報告された奈良県唐古・鍵遺跡（第1次調査）では、出土した弥生時代前期の木製品に対し、植物学者による同定分析が行われた。その結果、鍬や鋤類等の農具や斧柄には強度特性が高いアカガシ亜属が集中的に用いられていたことが示された〔末永・小林1943〕。また1943年に不時発見され、1947年に発掘調査が再開された静岡県登呂遺跡では、弥生時代後期の出土木製品に対して樹種同定が行われた。その結果、唐古・鍵遺跡と同様、やはり農具にアカガシ亜属が用いられていたことが判明した。その後、大分県安国寺遺跡（1949～1952年）、静岡県山木遺跡（1950年）、大阪府池上曾根遺跡（1972年～）等、低湿地遺跡から出土する木製品についても同じ傾向がみられたことから、日本列島の弥生集落では農具を作る際にはアカガシ亜属を用いることが一般的であるとの認識が広まった。

しかし資料の蓄積が進んだ1980～1990年代を経ると、この「常識」は徐々に揺らぐこととなる。日本列島において最も早く稲作文化が定着した集落の一つと考

えられている福岡県雀居遺跡では、その出土農具の多くがクヌギ節製であった〔福岡市埋蔵文化財センター1983〕。韓国光州の新昌洞遺跡から出土した農具が同じくクヌギ節製であることをふまえると、大陸から伝来したとされる初期稲作を担った農具は、クヌギ節を意識的に選択して製作された可能性が高い〔山口2000〕。ただし、時代が下がるにつれてアカガシ亜属で作られるものが多くなることから、用材の選択基準は木の特性とともに材の入手が容易であるかどうか大きな要因であること、そしてそれは集落をとりまく植生や環境に依拠することが指摘されるようになった〔佐藤2008〕。

現在の認識から言えば、この指摘は的確である。粘りの強さや加工のしやすさ等、木そのものがもつ特質と集落周辺の植生が木製品の用材選択に大きな影響を及ぼしたであろうことは想像に難くない。ただし、この2点のみでは説明できない事象もまた存在している。

2006年、用材選択の地域性と時代ごとの特性を確認するため、伊東隆夫・山田昌久らは出土木製品の用材データベースの構築に着手した〔伊東・山田編2012、以下『木の考古学』と表記〕。筆者はこのプロジェクトにおいて、研究フィールドである近畿南部（大阪府・和歌山県）の状況を考

察する機会を得た。その結果、広葉樹と針葉樹の使用割合が弥生時代後期～古墳時代初頭に大きく転換すること、また用材傾向の変化は木製品の形状変化と密接に結びつくことを指摘した〔黒須2012〕。すなわち、人々が木製品を作る際に選択する用材は、自然環境や樹の特徴のほかに、人間社会の都合もまた影響しているのである。

以上をふまえ、本稿では、近畿（2府4県）より出土した弥生時代～近世の木製品の用材変化をたどることにより、その変化が何を契機としておこったのかについて考察したい。

なお、本稿で使用する用材データ及び器種名等の用語は、『木の考古学』に準拠する。ただしデータレコードの件数は、『木の考古学』掲載分のうち人間が加工を加えたもののみを用い、それ以外のもの（非加工木・立木・根株・流木等の自然資料）を除くこととする。また、樹種の表記は基本的に属以下（属・亜属・節・亜節・種のいずれか）まで同定されたものを対象とし、その名称は『木の考古学』において「統一樹種」として示されたものを用いる（文末別表参照）。なお、大阪府内のデータについては『木の考古学』刊行以後に報告された情報も付加した。

2. 植生と用材傾向の推移

2-1. 大阪府の地形と植生

ここでは、地域の植生と用材傾向を把握する実例として、大阪府のデータを示したい。まず、大阪府内の植生と遺跡の立地について、時代ごとに記述する。

大阪府は、瀬戸内海を西に臨む河内平野と、これを取り巻く山地および丘陵地から成る。現在も摂津・河内・和泉の旧三国の地名に拠る地域呼称がなされており、淀川より北を東摂津地域（西摂津は兵庫県東部を指す）、旧大和川より南を和泉地域、両川に挟まれた地域を河内地域と称する。河内地域は、淀川流域の北河内、大和川支流の石川流域にあたる南河内、中央部に相当する中河内に細分することができ、それぞれ遺跡のあり方に特色をもつ。府内における気候の寒暖差や降水量にそれほど差は無いが、海拔0 mに近い沖積低地である中河内と、台地が続く和泉地域、山地を有する東摂津地域の北部とでは、その土壌は大きく異なる。

現在復原されている縄文時代晩期～弥生時代前期の日本列島の植生分布をみると、西日本以南に亜寒帯針葉樹林域はほとんど見られず、低地は常緑照葉樹林域、山地や高地は冷温帯落葉広葉樹林域、その中間にあたる山麓や丘陵地は暖温帯落葉広葉樹林域に相当する（図1）。大阪府域は、ほぼ暖温帯落葉樹林域と照葉樹林域に相当し、細かい地形や日照条件によりそれらの混交樹林が形成されていた。また、本来入江であった河内潟が埋没した中河内は、より湿潤な土壌を好む樹木が生長しやすい環境下にあった。これらのことから、山地にはブナ、ミズナラ、ハルニレ、ケヤキ、トチノキ、カエデ類等に混じり針葉樹が、丘陵地付近にはシイやカシのほか、イスノキやタブノキ、低木のアオキ等が、低地には、湿潤な土壌を好むハンノキやクスノキが繁茂していたと想像される。

木製品を製作する縄文時代晩期～弥生時代前期の集落は、淡水化が進んだ河内湖周辺とこれにそそぐ河川の沿岸部において誕生する。出土した直柄斧柄や鍬鋤類には、コナラ亜属やアカガシ亜属が一貫して用いられており、これらの材の入手が安定的に可能であったことが窺える。なお、周辺の遺跡各所でおこなわれている土壌の花粉分析でも、コナラ亜属やアカガシ亜属の優勢が認められており〔辻本ほか2006〕、弥生時代の人々にとっては身近に生育する樹木であったことが想像される¹⁾。

2-2. 用材の移り変わり

次に上記の植生の状況を念頭に置きながら、大阪府内より出土した木製品の用材を見る。

大阪府内の調査において、これまでに同

定された出土木製品の樹種は154種にのぼる(表1)。図2には、時期区分ごとに用材の同定点数を示し、左側に広葉樹を、右側に針葉樹(アミカケ部分)を配した。これをみると、針葉樹の占める割合が時代を追うごとに高くなるのがわかる。縄文時代後期から弥生時代中期までは27%程度と大きな変化はないが、弥生時代後期～古墳時代前期には約38%、古墳時代中期～後期には約55%、古代以後は60%を越える数値となる。このことから、針葉樹の割合が増加に転じる弥生時代後期～古墳時代前期にひとつの画期があることが認識できる。また、二次林種であるマツ属・複雑管束亜属の割合の増加は徐々に顕著となり、大阪府域の特徴のひとつとなっている。以下、時代区分ごとに特色を示す。



図1 縄文時代晩期～弥生時代早期の植生復元図〔安田1992を参照して作成〕

(1) 縄文時代晩期～弥生時代前期

〔試料数524点〕

日本列島内で差はあるものの、本稿では紀元前10～5世紀頃までを縄文時代晩期から弥生時代前期として扱う。使用された木材は、広葉樹7：針葉樹3の割合である。

広葉樹では、アカガシ亜属、クスノキ、クヌギ節、クワ属、ケヤキ、サカキの出土割合が高い。アカガシ亜属の使用が目立つのは、直柄斧柄を中心とした工具や、鍬、鋤、杵などの農耕土木具に多用されているためである。クスノキ、クワ属（主としてヤマグワ）、ケヤキは、臼や臼物容器、杓子等の調理加工具に使用されている。クスノキの大径木は、軟質で加工がしやすい中央部分を削り込んで脱穀用の臼として用いている。サカキは、主として曲柄斧柄に利用されている。枝分かれ部の屈曲角度が曲柄斧柄の作成に都合がよいためであろう。

針葉樹では、モミ属、コウヤマキ、ヒノキ属が多い。コウヤマキとヒノキ属は棺材に使用されており、両種を組み合わせたものも見られる。その場合、ヒノキは棺蓋や棺身の小口板および小児棺に、コウヤマキは棺身本体や底板に使用されることが多い。コウヤマキの防水性に着目した選択である〔鈴木裕明2012〕。モミ属は特に河内地域において漁労具のヤス（刺突具）に多用されているが、これはスギに比べて縦方向に割裂しやすいという特質を利用したものと考えられる。そのほか、カヤ、イヌガヤ属は弓や網棹に使用されている。水湿に強く弾力に富む性質によるものである。

(2) 弥生時代中期〔試料数3,115点〕

紀元前4世紀～紀元前後頃を弥生時代中期として扱う。弥生時代中期は報告されている同定点数をもっとも多く、かつ種類も多岐にわたる。広葉樹と針葉樹の比率は、前代と比べて大きな変化はみられない。

広葉樹では、アカガシ亜属の割合が若干減少するが、依然として農耕具や土木具、工具に多用されている。クスノキ、クヌギ節、クワ属、ケヤキ、コナラ亜属、サカキ等も利用されているが、前代ほど特定の樹種が突出する状況にない。ただし、前代には見られなかったシイ属の増加があり、これは後代へも続く。シイ属は伐採に強く、一度攪乱された土壌において生育しやすい。このため人間の生活痕跡が顕著な集落付近によく見られる。前代より続く集落周辺の開発により、自然繁殖した可能性が考えられる。シイ属の材は細かい建築部材や施設材として幅広く使用されていることから、身近で得やすい木材であったと推測される。

針葉樹では、それぞれの使用絶対数は飛躍的に延びるものの、割合にそれほど大きな変化はない。ヒノキ属の割合がやや増加するのは、棺材以外に建築材や容器、施設材等への用途が広がったことによる。特に建築部材の柱材として使用される例が目立つのは、大規模な掘立柱建物建設の増加によるものと考えられる。コウヤマキは、前代同様、棺材として利用されている。

表1 大阪府の出土木製品用材

	縄文後 ～弥生前期	弥生 中期	弥生後期 ～古墳前期	古墳 後期	古代	中世	近世		縄文後 ～弥生前期	弥生 中期	弥生後期 ～古墳前期	古墳 後期	古代	中世	近世	
アオギリ属		1						トウヒ属							1	1
アオキ属		1						トチノキ属	1	1		2		18	2	
アカガシ垂属	150	799	193	208	51	46	2	トネリコ属	1	6	5		1	2	1	
アカメガシワ	2	2	1	1				ナシ亜科							3	
アケビ属			3					ニガキ属		6					1	
アサガラ属		1				1		ニシキギ属	2	2		1				
アワブキ属		1				1		ニッケイ属		1		1				
イイギリ属						1		ニレ属		7	3				3	
イスノキ属						7	2	ニワトコ				1				
イヌシデ節				2				ヌクノキ				1				
イボタノキ属		7		1				ヌルデ		6		3	7	1		
ウコギ属			1					ネズコ属			1	1	2	9	1	
ウツギ属		2		7	2			ネムノキ属					1	7		
エゴノキ属		3	2			1		ノグルミ属			1					
エノキ属	1	26	9	5	2	31		ハイノキ属		4		3	2	18		
カエデ属		7	4	2		12		ハシバミ属					1			
カキノキ属		2	4	2		5		ハリギリ属							1	
カツラ属	1	10	1			1		ハンノキ属		2	3		1	5	1	
カナメモチ	2	3	2					ヒイラギ属					1	1		
ガマズミ属					1			ヒサカキ属		8	3	8	3	4		
カマツカ属		3		3	3	1		フサザクラ属	1		1					
キハダ属		75		1		1		フジキ属		1						
キリ属		4			2			フジ属	1							
クサギ属		2		1	1	3		ブナ属			2			12	2	
クスノキ	33	146	27	7	4	10		マタタビ属		1						
クマシデ属	1	2		2	9	2		マテバシイ属		3	2	1	3			
グミ属		1			1	1		ミズキ属		2	1	1		1		
クリ	1	12	6	9	9	30	6	ムクノキ属	2	26	5	8	8	7		
クルミ属					1			ムクロジ属		5	7	1		2		
オニグルミ			2	1				ムラサキシキブ属		4		2	2	1		
クワ属	87	164	22	17	18	9		モクレン属	1		5		1	2		
ケヤキ	16	96	57	39	14	27	4	モチノキ属	2	3		1	2	2		
ケンボナシ属	1	8	1			1		モッコク属		1	1	1		2		
コナラ属	5			1				ヤシ科					1			
コナラ垂属	5	73	78	6	3	20		ヤツデ属		2						
コナラ節	1	90	91	10	2	8		ヤナギ属	2	35	33	7	19	45		
クヌギ節	17	102	129	16	15	24		ヤマウルシ		1				2		
コルク				1				ヤマナラシ属		1				5		
サイカチ属			2			1		ユズリハ属	1	9	19	1		1	1	
ザイフリボク						1		リョウブ		4	1					
サカキ	16	117	47	18	21	19		その他広葉樹	4	75	41	33	27	7		
サクラ属	3	64	19	22	5	9		イチイ属						1		
バクチノキ		4						イヌガヤ属	15	27	6	3	1			
サンショウ属			1					カヤ属	17	112	21	27	7	12	3	
カラスザンショウ		2						イヌマキ属		2	3		1	2		
シイ属	4	174	136	48	8	16		モミ属	36	156	55	291	39	48	2	
シキミ		7	3	16	15	10		マキ属	8	1	1	1			1	
シラキ		1	1	1		1		ツガ属		2	2	40	4	8		
シロダモ属			3			1		コウヤマキ	7	124	38	37	39	16		
スノキ属					2			ヒノキ属	48	352	162	209	314	272	20	
シャヤンボ	3	9	7	3	7	3		サワラ					4			
センダン属	2					3		アスナロ属							1	
タイミンタチバナ		3		1				スギ	7	30	149	74	133	274	25	
タカノツメ属		1						その他針葉樹	2	5	4	22	2	10		
タブノキ属	3	18	17	7				マツ属	2	6	125	4	3	70	6	
タラノキ属	1		1					複雑管束亜属	2	26	41	33	121	202	33	
ツゲ属	2				5		3	単維管束亜属				1				
ツバキ属	6	12	23	12	9	6		合計	524	3115	1633	1290	960	1392	116	

(3) 弥生時代後期～古墳時代前期

〔試料数1,633点〕

紀元後1～3世紀頃を弥生時代後期～古墳時代初頭として扱う。前述のとおり、用材の割合主体が広葉樹から針葉樹へと転換しはじめる時期である。この時期には、調理加工具である匙・杓子や刳物容器の減少、板材を組合せて作る椅子や机といった調度の出現等、出土木製品の器種組成に大きな変化がある。また、平面円形の容器から方形槽への転換等、木製品の形状そのものにも変化が認められる。

広葉樹では、前時代に比べて二次林種であるコナラ亜属、クヌギ節、シイ属の使用比率が高い。クヌギ節を含むコナラ亜属は、曲柄鋏の柄としての使用が増加する。大阪では、弥生時代中期末に情報がもたらされたナスビ形曲柄鋏が普及し、弥生時代後期末～古墳時代前期に盛行する。アカガシ亜属、クスノキ、クワ属の割合は、前時代に比べて減少する。アカガシ亜属の農耕土木具の利用は依然として高い割合を保つが、工具の柄としての使用は激減する。これは伐採斧（石斧）の柄である直柄斧柄が減少し、袋状鉄斧を装着した大型曲柄斧柄が一般的となるためである。曲柄斧柄には、サカキやカヤが使用される例が多い。クスノキ、クワ属の減少は、刳物から曲物、指物へという容器の形態変化を反映している。

針葉樹では、マツ属（主に複雑管束亜属）の増加が顕著である。複雑管束亜属は、弥生時代中期までは橿や鋺、建築部材等、使用は限定的であったが、古墳時代前期になると堰材や護岸材、杭材等、施設材として

諸所に使われるようになる。これは、二次林の広がりによりマツ属そのものの自生が促進され、材が得やすくなったためであろう。また、前代までほとんど使用がなかったスギは、船（準構造船）や施設材、器具材のほか、前述した曲物容器への利用が始まる。組合せ棺の一部にも使用されることから、ヒノキの代替品としての意識がうかがえる。

(4) 古墳時代中期～後期

〔試料数1,290点〕

須恵器生産の導入から、これが本格化を遂げる5・6世紀を古墳時代中期～後期として扱う。さらに針葉樹の使用が多くなり、その比率は広葉樹4：針葉樹6程度となる。

広葉樹では、アカガシ亜属の使用割合が再び増加する。依然として農耕土木具に利用されるが、一方で割材が杭等の土木材や堰材に使用されるようになる。巨石等を運ぶ修羅にも用いられており、材質の堅さが重宝されていたことがわかる。その他の広葉樹は、全体的に使用量が縮小し、特にクヌギ節を含むコナラ亜属は減少は著しい。

針葉樹ではヒノキ属の利用が多く、スギも依然として一定割合を占める。ヒノキ属の利用は、主に建築部材であるが、6世紀になると齋串や形代を用いた律令祭祀のはじまりにより、祭祀具としての使用も増加する。また、この頃から、棺材にマツ属などを使う例が認められるようになる。葬送にかかわる樹種選定の原則も、時代により変化したようである。このほか、主に生駒山山麓の大型集落では、井戸等の施設材や

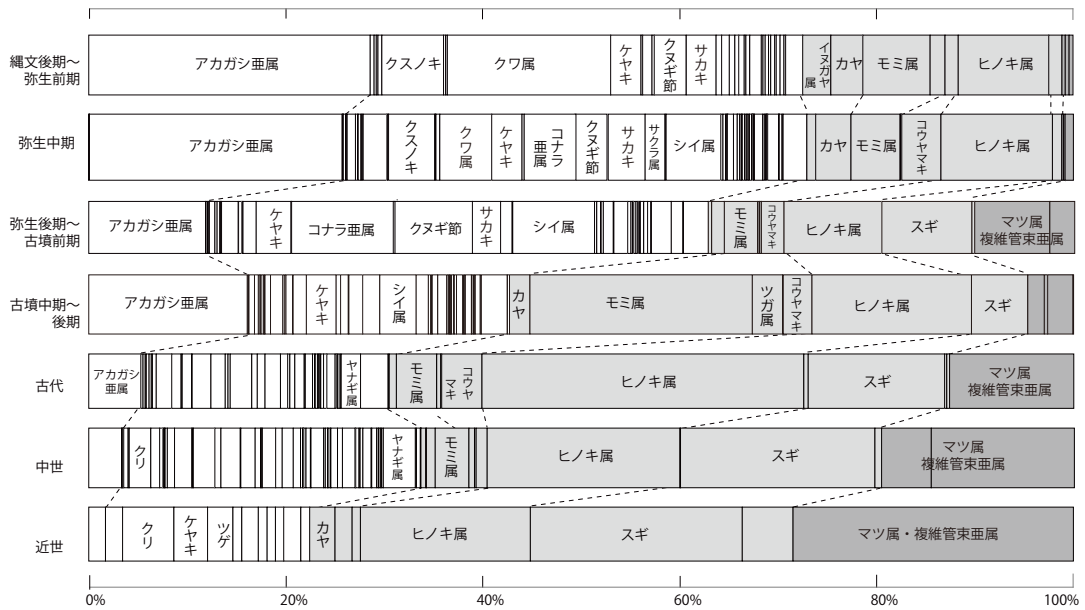


図2 大阪府の出土木製品用材推移

土木材にモミ属を用いる例が認められる。スギの代替品として使用された可能性がある。

なお、古墳時代の須恵器生産地として知られる陶邑古窯址群では、燃料材として広葉樹が多用されている。陶邑古窯址群は周辺に大規模な常緑広葉樹林帯を有する和泉地域に立地する。窯の燃料材として、周辺の樹木が供されたことは想像に難くないが、この営為により当地の植生は一変したと推測される。周辺遺跡において実施されている花粉分析結果では、古墳時代を境として、広葉樹種の激減が報告されている〔西田1976〕。

(5) 古代〔試料数960点〕

ここでは律令体制の萌芽期である飛鳥時代を古代の始まりとして捉え、奈良時代、平安時代を含めた7～12世紀までを古代として扱う。

古墳時代に比べ、広葉樹の使用はさらに

減少し、針葉樹の利用がますます顕著となる。広葉樹3：針葉樹7程度の割合である。この時期報告されているアカガシ亜属製の農耕土木具は、鋤や鋤ではなく杵や鎌柄が主体である。コナラ亜属、クヌギ節、カヤ属、クスノキ等の樹種は、ほとんどが護岸材や杭等、土木材としての利用であり、身の回りの生活用具としての出土例は極めて少ない。しかし、その中でもツゲが櫛に特化して使用されている点は注目される。

針葉樹では、木簡・荷札の用材として、ヒノキ属、スギが多量に使用されている。ヒノキについては文房具・祭祀具のほか、曲物、組物等の容器類、檜扇・履物等の服飾具、紡織具等、身近な品々として多用される。スギは、前代に引き続き、船材や井戸材など、大型部材に利用されている。マツ属・複雑管束亜属の多くは燃料材で、炭化した状態での出土が多い。

(6) 中世〔試料数1,392点〕

鎌倉時代、室町時代に相当する13～16世紀を中世として扱う。針葉樹の利用割合はやや減少するが、依然として広葉樹3：針葉樹7程度の割合を保つ。

広葉樹では、アカガシ亜属の使用数は突出せず、イスノキとクリの割合が増加する。イスノキは、櫛（横櫛）に使用される材である。大阪府内から出土する横櫛には、ツゲ製、ツバキ属製、イスノキ製があるが、いまのところ中世の出土例はイスノキに限られている。櫛の製作を生業とする「和泉国近木郷櫛供御人」の居住地に推定される泉佐野市上町遺跡・上町東遺跡からは、鎌倉時代の屋敷地内に掘られた井戸の中から、廃棄されたイスノキ製の横櫛および横櫛の未成品、木屑等が出土した。使用樹種における生産と消費の傾向が合致する好例として報告されている。

クリは、椀や下駄の素材として用いられている。大阪における木製椀（漆器椀）の初見は古代に遡り、ヤマザクラやアサガラ属、ナラ類が使用されていたが、中世になるとケヤキ・トチノキ・ブナ属など、寒冷地を好む広葉樹が主体を占める。このことは、当時の材の入手先と商品流通の実態を知る手がかりとなる。

針葉樹はヒノキ属をおさえて、スギが優勢となる。これまでヒノキ属を用いてきた器種をスギで代替する傾向が顕著である。スギはヒノキに比べて成長が早いため、市井の需要に応えることが可能だったと推測される。マツ属・複雑管束亜属は前代同様、土木材や燃料材に使用されており、杭や土留め材として、水田の整備等に供され

た。コウヤマキは火葬習俗の浸透のためか棺自体の残存例が少なく、容器や下駄としての使用が認められるようになる。埋葬具・葬具のみであったそれまでとは異なる利用法が試されている。

(7) 近世〔数116点〕

江戸時代である17～19世紀中葉までを近世として扱う。他時代と比べて資料数が少ないためあくまでも参考数値であるが、使用される樹種数が減り、単調となる印象がある。

広葉樹と針葉樹の比率は針葉樹が再び増加し、広葉樹2：針葉樹8程度にまで及ぶ。クリやケヤキ、ブナは漆器椀に、イスノキは前代同様、櫛に利用されている。針葉樹は、スギやマツ属で作る下駄のほか、結物桶などの大型容器に用いられており、その使用頻度は高い。特にマツ属・複雑管束亜属の使用は大幅に増え、施設材や土木材の常用品となる。

以上の分析により、大阪府内における用材選択の特徴として、以下の点を見出す事ができる。

- ①弥生時代前期には、材の堅さや弾力性、加工の容易さ等、木の特性に応じた用材選択により広葉樹が多く用いられていた。
- ②弥生時代中期になるとシイ属やマツ属等、二次林に生成する植物の利用割合が増加した。
- ③広葉樹と針葉樹の使用割合は弥生時代後期～古墳時代初頭に転換がはじまり、古墳時代中期～後期には逆転する。古代に

は針葉樹の使用はピークをむかえ、中世以降も生活用品の多くが針葉樹で作られる。

④近世には用材種が単調となり、漆器椀にはケヤキやクリ、櫛にはツゲ等、それぞれの材が限定的に使用されるようになる。

このうち、①は冒頭に掲げたとおり、弥生時代の人々が木材（特に広葉樹）の特徴を心得ており、これに基づく選択を行っていたことの追認である。②は、集落を取り巻く植生や環境変化との関わりの中で説明できる事象であろう。問題となるのは、主に針葉樹の利用に関わる③である。上述のとおり、弥生時代から古墳時代への転換期には、木製品の形状も大きく変化した。この変化には、準構造船や大型建物、調度類の導入など、いわば社会的、文化的変動に影響を受けたものがある。なお、④については、木製品製作専門集団の存在など、さらに高度な社会的分析が必要となる。

3. 用材傾向の比較

3-1. 近畿各府県の用材傾向

次に近畿地方の各府県の用材傾向を概観し、大阪府内の状況と比較する。なお、ここでは、データ数が100点以下の時代については無効とし、参考として掲げた。

(1) 京都府内の用材傾向

京都府は日本海に面した丹後地域と、山に囲まれた盆地である山城地域から成る。同定されている樹種は計68種と少ない。

資料数は、縄文時代後期～弥生時代前期が24点、弥生時代中期が71点、弥生時代後期～古墳時代前期が307点、古墳時代中期～後期が235点、古代が1,307点、中世が344点、近世が12点である。縄文時代後期～弥生時代前期、弥生時代中期、近世は、資料数が少ないため有用なデータではないが、弥生時代中期までは針葉樹の割合が低く、その後増加に転じる状況は、大阪府、兵庫県と同じ傾向にあると言える。

広葉樹は、やはりアカガシ亜属の使用割合が高く、その多くが農耕具である。その他は施設材としての利用である。弥生時代中期にシイ属が増加する点は、大阪府内の状況と共通している。古代、中世の器種組成は、カエデ属やケヤキ製の漆器椀が主体である。

弥生時代後期～古墳時代前期の針葉樹は多くがスギの利用で、日本海に面した京丹後市古殿遺跡から出土した製品が主である。太平洋側ならばヒノキで作るもののほとんどをスギで製作する傾向が認められる。古墳時代中期～後期のスギ、ヒノキは形代、古代は木簡に多用する。なお平安京跡を含む京都市内では、中世においても引き続き形代が出土するため、スギ、ヒノキの出土割合は高い。

(2) 兵庫県内の用材傾向

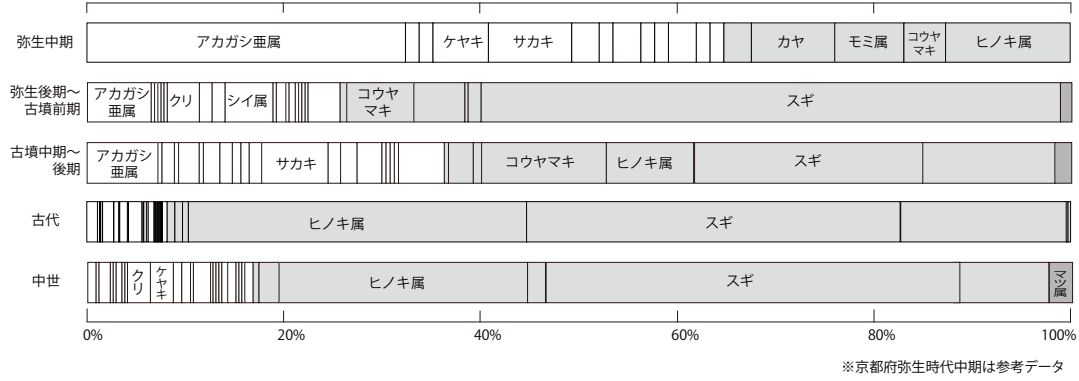
兵庫県は日本海に面した丹波地域、但馬地域と、瀬戸内海に面した西摂津地域、淡路島、瀬戸内海から山間部までを含む播磨地域の5地域から成る。大まかな傾向では、西摂津地域の様相は大阪府内に近く、播磨、丹波、但馬地域はスギを多用する山

陰地方に近い。

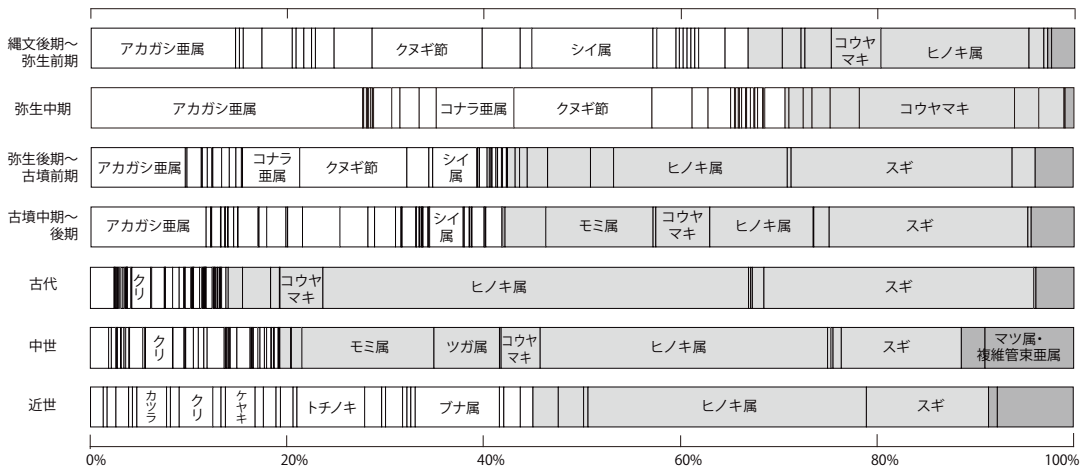
同定されている樹種は計107種である。
資料数は、縄文時代後期～弥生時代前期が

260点、弥生時代中期が812点、弥生時代後期～古墳時代前期が760点、古墳時代中期～後期が1,415点、古代が3,332点、中

【京都府】



【兵庫県】



【滋賀県】

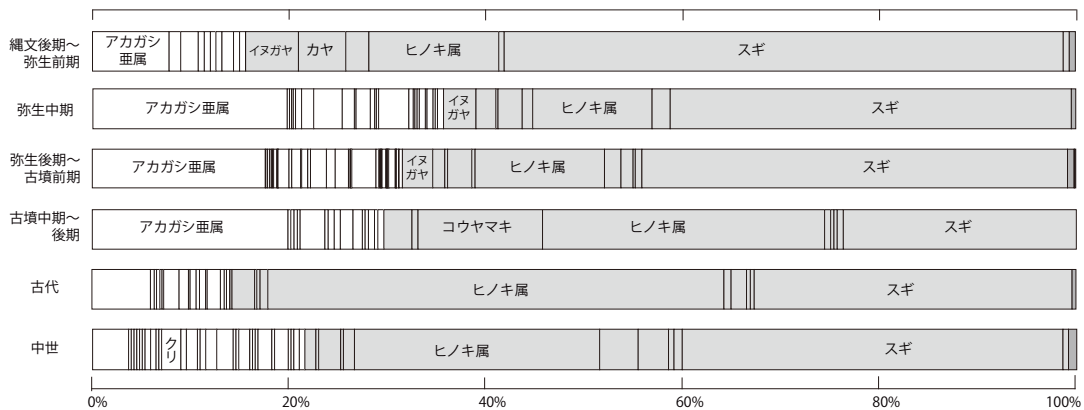


図3 京都府・兵庫県・滋賀県の用材傾向

世が1,556点、近世が233点である。縄文時代後期～弥生時代前期、弥生時代中期は大阪府と同じく広葉樹の割合が高い。また、弥生時代後期～古墳時代前期に針葉樹の割合が増加に転じる点や古代にピークを迎える点も類似する。ただし、その転換は大阪府内よりも急速である。

広葉樹では、弥生時代から古墳時代までアカガシ亜属が優勢である。農耕土木具のほか、堰の構築材等にも割材が使用されている。他にクヌギ節とシイ属の使用も顕著で、杭材や土留め材として多用されている。主に瀬戸内海に面した西摂津地域での状況である。古代以降は、アカガシ亜属の突出は見られなくなり、主な生活用品は針葉樹で製作されるようになる。クリは古代では杭や堰等の施設材として使用されていたものが近世になると漆器椀や皿等、容器としての利用に変わる。カツラやケヤキ、トチノキ、ブナ属も多くが椀である。

針葉樹（ヒノキ・コウヤマキ）は、弥生時代中期までは多くが棺材として用いられており、日用品としての利用は少ない。しかし弥生時代後期～古墳時代前期になると、容器や生活用品、武具や工具の柄等に用いられる。古代にはさらにその傾向が顕著となり、曲物容器や形代、斎串等への使用頻度が非常に高い。中世では祭祀具の出土は減少するものの曲物容器や箸等の生活用品としての利用が引き続き多い。近世になると、針葉樹の使用比率はやや下がり、6割程度となる。大阪府内に比べるとスギの使用割合が高く、弥生時代後期以後は一定量を保つ。その用途はヒノキよりもバラエティに富んでおり、調度や紡織具も作ら

れている。主に播磨、丹波、但馬地域の遺跡からの出土である。マツ属・複雑管束亜属の使用は徐々に増加する傾向にあるが、大阪府内ほど顕著ではない。

（3）滋賀県の用材傾向

琵琶湖の湖岸に相当する滋賀県では、縄文時代後期～晩期の報告例が他府県よりも多い。

同定されている樹種は計75種である。資料数は、縄文時代後期～弥生時代前期が357点、弥生時代中期が520点、弥生時代後期～古墳時代前期が317点、古墳時代中期～後期が1,953点、古代が485点、中世が1,678点、近世が0点である。他の府県とは異なり、縄文時代後期～弥生時代前期における針葉樹の割合が非常に高く、8割以上を占める。その後、針葉樹は減少に転じるものの、古代には再び8割を超え、そのまま中世へ連続する。

広葉樹ではアカガシ亜属が優勢で、弥生時代前期に琵琶湖岸に形成された集落から出土する農耕具が中心である。この傾向は、古墳時代中期～後期まで変化しない。古代になるとアカガシ亜属の割合は小さくなり、中世には漆器椀の木胎としてカツラやケヤキ等の使用が目立つようになる。また、建物の柱としてクリの使用がある。

針葉樹は、スギの占める割合が非常に高い。縄文時代後期～弥生時代前期では、丸木舟と櫂の出土が多く、運搬具に類される。イヌガヤ属とカヤ属は、弓や網棹等の狩猟具や漁労具への使用が主体である。おそらく、この針葉樹の割合の多さは、集落の生業と使用される道具の性格によるとこ

ろが大きいのであろう。弥生時代中期には農耕集落が増加し、針葉樹の割合は6割程度まで下がる。ただし、スギで鋤を作る例があることから、スギへの志向は変わらず強いと言える。古墳時代に入ると、船や農耕土木具に加えて容器や調度をスギで作る例が増加し、その割合も顕著となる。古墳時代後期に一時的に増加するコウヤマキは棺材への使用が主である。古代になると斎串や形代などの祭祀具、挽物容器、曲物容器等への利用でヒノキ属が優勢となるが、中世にはヒノキの代替品として再びスギの割合が増加している。

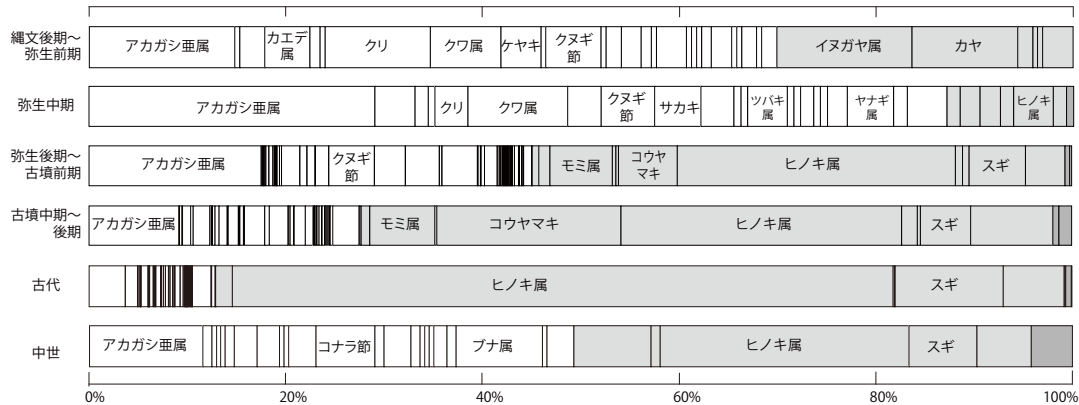
以上の通り、滋賀県内と大阪府内とでは、あまり類似点が認められない。

(4) 奈良県の用材傾向

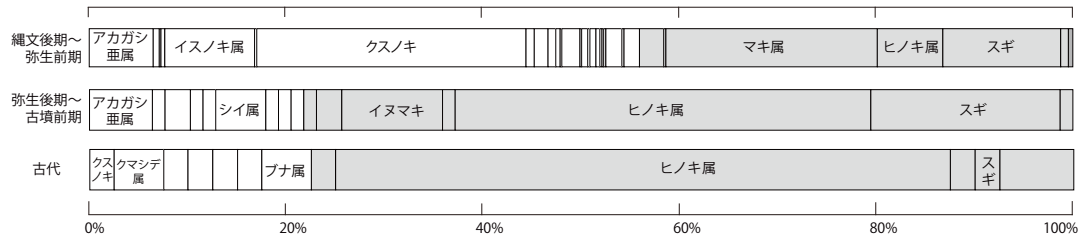
同定されている樹種は計98種である。資料数は、縄文時代後期～弥生時代前期が197点、弥生時代中期が148点、弥生時代後期～古墳時代前期が1,622点、古墳時代中期～後期が1,602点、古代が5,940点、中世が214点、近世が16点を数える。近世は無効データであるが、やはり針葉樹の出土割合の推移は、大阪府、兵庫県、京都府と同じ傾向にある。弥生時代中期までは広葉樹の使用が大多数に上るが、弥生時代後期～古墳時代前期には針葉樹が増加、古代にはピークを迎え、その後、減少に転じる。

広葉樹では、アカガシ亜属が中世まで一定割合を占める。多くは燃料材としての利用である。他には、クリやクワ属、ケヤキ

【奈良県】



【和歌山県】



※和歌山県弥生時代後期～古墳時代前期、古代は参考データ

図4 滋賀県・和歌山県の用材傾向

の使用が目立つ。縄文時代後期～弥生時代前期では、クリは施設材として、クワ属やケヤキは高杯のほか、鉢等の刳物容器として用いられている。クワ属やケヤキを容器の用材とする選択は大阪府域と共通する。弥生時代を通じて確認されているクヌギ節は、曲柄斧柄や杵の用材である。

針葉樹では、縄文時代後期～弥生時代前期におけるイヌガヤ属とカヤ属の割合が高い。その多くが弓の用材であり、狩猟具に類される。ヒノキ属は弥生時代後期～古墳時代前期に急増し、調度、祭祀具、武器、建築材等、多様な製品が生産されるようになる。一方、スギの使用割合は低く、他の府県とは異なる様相をみせる。古墳時代後期にはコウヤマキの増加が顕著で、棺材のほか、古墳の周囲に立てられる木製樹物^{たてもの}への使用がある。古代になると平城京内での木簡利用や大型建物の建築により、ヒノキ属の多用がさらに目立つ。なお、平城宮・平城京内では、柱材としてのコウヤマキが限定的に使用されており、階層的な占有が想定されている〔木沢2014〕。中世に入ると針葉樹の割合は下がるが、これは燃料材として使用された広葉樹が割合を高めたため、他府県の動向と同じく曲物等の容器や生活用具の出土は多い。

(5) 和歌山県の用材傾向

和歌山県域での同定報告点数は非常に少なく、計45種に留まる。資料数は、縄文時代後期～弥生時代前期が495点、弥生時代後期～古墳時代前期が78点、古墳時代中期～後期が1,415点、古代が40点、中世が4点で、現時点では弥生時代中期と近世の

報告がない。上記のうち有効データは縄文時代後期～弥生時代前期のみであるが、すべて紀伊半島の先端に位置する西牟婁郡すさみ町立野遺跡からの出土品で、その時期は弥生時代前期中段階後半に限定される。参考データを含めてその推移を見ると、弥生時代に広葉樹が多く、弥生時代後期～古墳時代前期に針葉樹への転換が見える点は、大阪府内と共通するようである。

広葉樹では、農耕土木具にアカガシ亜属とイスノキ属を用いる点が特徴的である。イスノキ属は暖地に生育するため、入手しやすい材であったと推測される。アカガシ亜属は直柄鋏に、イスノキ属は曲柄鋏の鋏身として明確に使用分けされている点は非常に興味深い。また、容器としてクスノキを多用する点は大阪府内に類似している。

針葉樹では、マキ属が卓越している。その多くが半裁材や分割材で、一時的な原材料のストックである可能性がある。弥生時代後期以後はヒノキ属の割合が高く、スギの使用量は少ない。準構造船や櫂等の運搬具もヒノキで作られており、スギを多用する滋賀県とは異なる様相にある。

3-2. 近畿各府県の共通点と相違点

以上、近畿各府県の用材傾向について記述した。共通点と相違点は以下のとおりである。

(1) 近畿地方の共通点

- ① 縄文時代後期～弥生時代前期、弥生時代中期では、広葉樹の割合が針葉樹を大きく上回る（但し、滋賀県を除く）。
- ② 弥生時代後期～古墳時代前期には、針

葉樹の割合が増加し、広葉樹の割合が減少に転じる。

- ③ 広葉樹のうち、弥生時代にもっとも大きな割合を占めたアカガシ亜属は古代になると減少し、シイ属やクリ等、他の広葉樹と変わらない出土割合となる。

(2) 府県個別の類似点、相違点

- ④ 針葉樹の内訳を見ると、北近畿（兵庫県、京都府、滋賀県）ではスギの利用が多く、南近畿（大阪府、奈良県、和歌山県）ではヒノキの利用が多い。
- ⑤ 大阪府内と兵庫県西摂津地域は、傾向に親縁性がある。弥生時代における針葉樹の利用割合や弥生時代後期～古墳時代前期にスギの使用が顕著となる点、同時代に広葉樹の組成に二次林種（コナラ亜属、シイ属）が増加する点、古墳時代中期にモミ属の利用が増加する点等が挙げられる。逆に大阪府内と滋賀県内の出土例とでは、共通点が少ない。
- ⑥ 弥生時代前期に刳物容器や臼としてクスノキを多用する点は、大阪府内と和歌山県内にのみ認められる傾向である。また、容器にクワ属を用いるのは、大阪府内と奈良県内に特有の現象である。
- ⑦ 大阪府域のみに認められる特徴として、全体的に広葉樹の使用樹種数が多く、使用割合が高いこと、針葉樹ではマツ属・複雑管束亜属の使用割合が高いことが挙げられる。

共通点、相違点のいずれにおいても、用材選択には集落周辺の植生環境と木の特性が大きく影響することは明白である。①は木の堅さや粘り、加工の容易性を生かした結果であり、④は好陽性のヒノキと寒冷地である日本海側でも育成が早いスギという、木の特性と気候環境の特徴に基づく違いである〔鈴木2002〕。

⑤⑥は隣り合う地域における環境の共通性として説明できる。特に、原生林が残る弥生時代前期においてこのような類似を認めやすいのは、気候や土壤環境が植生の形成と深く関係するからであろう。⑤における、二次林植物の利用増加やヒノキ属からスギへの転換、さらにマキ属で代替する等の現象は、原生林の伐採によって生じた環境変化（破壊）が河内湾沿岸部において一律に進んだことを示している。特に大阪府内はその速度が早かったようであり、木材の枯渇は「使える材は何でも使おう」という意識として表れたのであろう。その結果、⑦のように多様な樹種が用いられることとなったと推測される。二次林種の代表であるマツ属の使用数の多さも、これを示唆している。

4. 生産と用途の変化

－アカガシ亜属を事例として－

4-1. アカガシ亜属の利用減少と

用途の変化

上記の共通点と相違点のうち、植生や木の特性による選択では説明できないのが近畿各府県に共通して認められる「③アカガシ亜属の使用割合の減少」である。

図5は、近畿各府県より出土したアカガシ亜属の製品のうち、主要な器種（合計点数が100点を超えるもの）について、時代ごとにその点数を示したグラフである。既述の通り、アカガシ亜属の総出土点数は弥生時代中期と弥生時代後期～古墳時代前期の2時期にかけて非常に多いものの、その後は減少の一途を辿る。弥生時代と古墳時代前期にもっとも多い用途は農耕具の鋤（鋤身）であるが、古墳時代中期～後期になると著しく減少し、古代以後は僅かとなる。この消長は、同じく農耕具である鋤も同様である。原材料である加工材（丸太材、分割材、ミカン割材等）もあわせて減少することから、アカガシ亜属の大径木を用いた製作行為そのものが縮小傾向にあったといえる。

農耕具のほかに点数が多いのは、施設材・器具材・土木材である。鋤・鋤類と同じく弥生時代中期をピークとし、その後減少するがカーブは比して緩やかである。施設材・器具材・土木材の中には、井戸の構築材や木道、杭、堰材、護岸材等、多様な部材が含まれている。出土数をもっとも多

いのは弥生時代中期であるが、古墳時代中期～後期には鋤・鋤類よりも多くなり、古代になってから減少する。

一方、これらとは逆に古代以後に増加するのが燃料材としての使用である。出土遺構には、兵庫県汁谷窯跡群の須恵器窯（飛鳥時代）、奈良県太安萬侶墓地の木炭塚（奈良時代）、滋賀県東谷遺跡の製鉄炉（奈良時代）、三ツ塚古墳群の火葬墓関連遺構（平安時代）、兵庫県牧野・町西遺跡の鑄造関連遺構（鎌倉時代）等があり、いずれも不時の火災等によって生じたものではなく、燃料として用いる意図が働いたものである。カシやナラ、クヌギ等の天然木は、現在でも炭焼きの良材とされることから、この利用は木の特性に適う用途であると言える。

4-2. 鋤・鋤の用材選択

問題となるのは、アカガシ亜属製の農耕具が古代以後に激減すること、またアカガシ亜属の使用頻度そのものが大きく減少することである。

近畿地方の農耕具については、弥生時代後期末に直柄鋤から曲柄鋤へという形態変

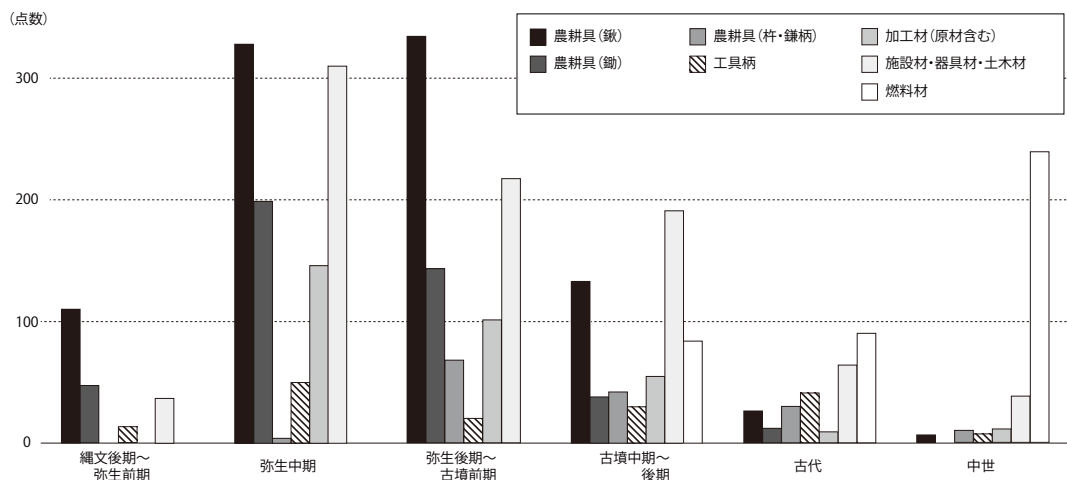


図5 近畿におけるアカガシ亜属の用途の変遷

化と、金属製の刃を装着して使用するようという物質的な技術変化がおこる（第2章第5節参照）。鉄製刃先は、弥生時代後期～古墳時代前期には鉄板の両端を折り曲げて鋤・鋤の先端に装着する板状鉄刃が中心であったが、古墳時代中期～後期には、ソケット状に装着するU字型鉄刃に置き換わる。このU字形鉄刃の威力は絶大で、農耕および土木作業の作業効率が飛躍的に向上したであろうことは想像に難くない。事実、U字形鉄刃はその後広く普及し、後代へ続く。

このことは、逆に言うと、その堅さゆえに鋤鋤類の刃先として選択されていたアカガシ亜属の絶対的価値を下げることにつながる。鋤鋤で使い減りするの専ら刃であるが、鉄刃を装着する場合は、その刃先は

何度でも付け替えることができる。むしろその土台となる鋤身（風呂鋤の身）に対して求められるのは、適度な強度と加工のしやすさ、衝撃の吸収性等であり、それは必ずしもアカガシ亜属でなくても良い。

図6には近畿地方から出土した弥生時代～古代の鋤鋤類のうち、直柄鋤の身と柄、組合せ鋤の身と柄の用材について示した。これを見ると、刃部を含む部分である直柄鋤身と組合せ鋤身は、そのほとんどがアカガシ亜属で作られているが、その柄にはアカガシ亜属以外の材もある程度用いられている。このほか、馬や牛に曳かせて田畑を耕す馬鋤には、歯（刃）をアカガシ亜属、台をその他の材で作るものがある。つまり、刃部には堅いアカガシ亜属を用いる必要があったものの、これに装着する柄や台

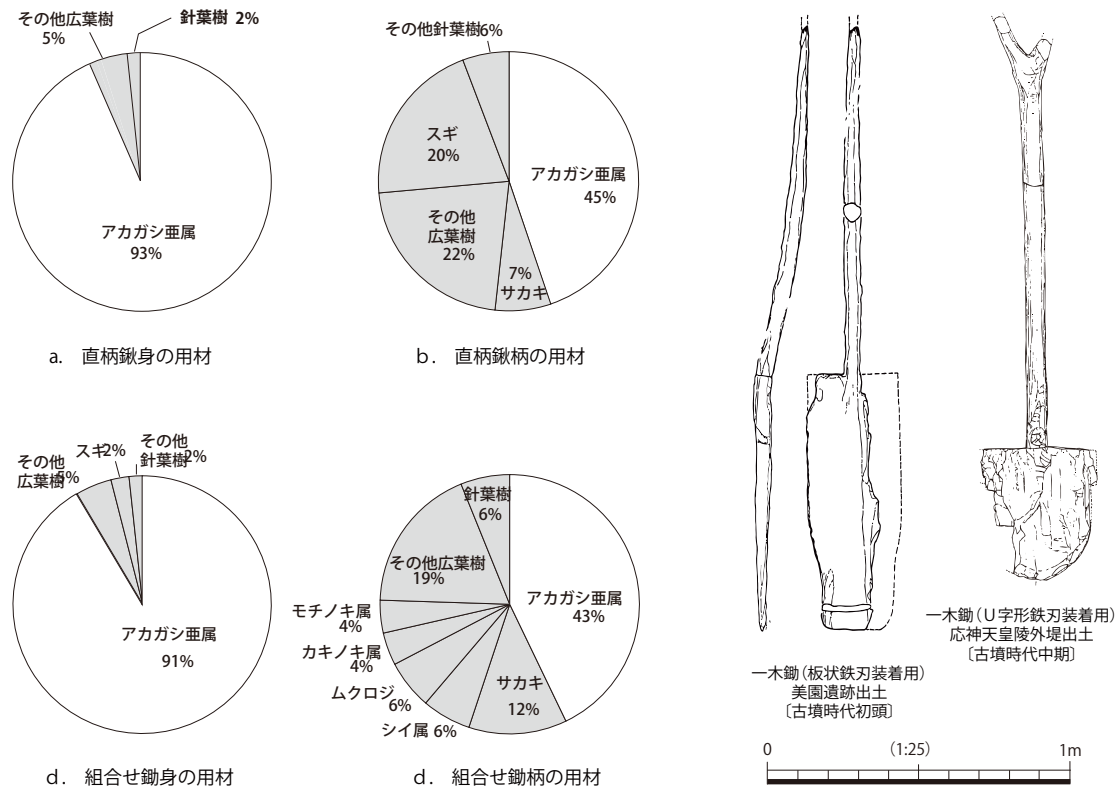


図6 鋤・鋤の身と柄の用材

には厳密な制約がなく、幅広い選択が可能であったとみることができる。柄は、使用者個人個人の嗜好が端的に現れる部分であるため、衝撃吸収性や軽さ、堅さ等、好みに応じて様々な用材選択が試されたのだろう。

堅い物質は衝撃吸収性が低く、打ち込んだ力がそのまま使用者にはね返るといった難点がある。鉄刃の出現は硬質土壌の開拓を可能にしたが、その衝撃に耐え得る台の選択もまた必要となった。軟質土壌を耕す鋤の需要も引き続き存在したことから、鋤身・鋤身の用材は、アカガシ亜属一辺倒ではなく様々な選択が為されるようになったと考えられる。

5. おわりに

以上、近畿地方の木製品の用材選択について記述した。

近畿地方では、弥生時代に滋賀県を除く2府3県で広葉樹主体の選択が為される。また針葉樹選択への転換が弥生時代後期～古墳時代前期にあり、古代にそのピークが訪れる。この事項は、すでに『木の考古学』において担当者により各府県レベルで指摘されたところであるが、本稿ではこれらを同じ条件下でグラフ化することにより、その傾向を追認し、近畿一円の傾向であることを示した。また、同じ広葉樹であってもその構成樹種は府県ごとに異なり、必ずしも一律的に変化を遂げたわけではないことを、あわせて見出した。

類似点と相違点についてはその両者を見ることにより、隣接する府県との間に使用

樹種やその変遷に親縁性が認められること、またその要因が植生の類似性に基づくものであること、加えて大阪府域においてのみ顕著な傾向（使用樹種の多様さ、二次林種の増加速度等）を、具体的に示す事ができた。

さらに、共通点と相違点から看取される「アカガシ亜属の減少」現象について考察した結果、弥生時代後期以後に導入される金属刃の装着によりその需要が大きく減少したこと、古代以後は地中への存置が前提となる施設材や土木材、焼失する燃料材への使用転換が図られたことを見出した。このことは、古代以後、木製品の出土量総数が大きく減少する傾向とあわせて、注目されるところである。

なお近畿地方では、低湿地における開発が相次いだ1960年代以降、多くの出土木製品が報告されてきたが、必ずしも樹種同定が積極的におこなわれているとは言えない状況にある。出土量と同定数には大きな開きがあり、既報告の遺物についても、再度、樹種同定を試みる機運が必要と思われる。

今後、増加が予想される近畿各府県の出土資料もあわせて、さらなるデータの蓄積を期待したい。

註

1) 辻本裕也氏(古生態研究所)のご教示による。

引用・参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久 編『木の考古学 出土木製品の用材データベース』海青社, 2012年。
- 伊東隆夫「3章 データベースに出てくる樹種の種類」, 『木の考古学 出土木製品の用材データベース』海青社, 2012年。
- 河村寿昌・西川栄明『原色 木材加工面がわかる樹種事典』誠文堂新光社, 2014年。
- 木沢尚子「21章 南近畿(3) -奈良県(古代以降)-」, 『木の考古学 出土木製品の用材データベース』海青社, 2012年。
- 黒須亜希子「19章 南近畿(1) -大阪府・和歌山県-」, 『木の考古学 出土木製品の用材データベース』海青社, 2012年。
- 佐藤浩司「九州」『季刊考古学』第104号, 雄山閣, 2008年。
- 末永雅夫・小林行雄ほか『大和唐古弥生式遺跡の研究』, 1943年。
- 鈴木裕明「20章 南近畿(2) -奈良県(古代以降)-」, 『木の考古学 出土木製品の用材データベース』海青社, 2012年。
- 鈴木三男『日本人と木の文化』, 八坂出版, 2002年。
- 鈴木三男「8章 出土木製品利用樹種の時代的変遷」『木の考古学 出土木製品の用材データベース』海青社, 2012年。
- 高原 光・竹岡政治「京都市八丁平湿原周辺における最終氷期最盛期以降の植生変遷」『日本生態学会誌』36(2), 1986年。
- 辻本裕也・松元美由紀・高橋 敦・辻 康男「B地区の古環境変遷」, 枚方市文化財調査報告書 第48集『小倉東遺跡II』, 枚方市教育委員会, 2006年。
- 西田正規「泉陶器邑と木炭分析」, 大阪府文化財調査報告書 第28輯『陶邑I』, 大阪府教育委員会, 1976年。
- 藤田 淳・阿刀弘史「18章 北近畿-京都府・兵庫県・滋賀県-」, 『木の考古学 出土木製品の用材データベース』海青社, 2012年。
- 松江実千代「新池遺跡周辺における古植生とその変遷」『高槻市文化財調査報告書第17冊 新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書』, 高槻市教育委員会, 1993年。
- 松田順一郎「河内平野沖積地南部における完新世湖畔の旧大和川分流路発達と人間活動」『第50回埋蔵文化財研究集会 環境と人間社会 ~適応, 開発から共生へ~ 発表要旨集』, 埋蔵文化財研究会, 2001年。
- 宮崎泰史「武威の祭り」『平成10年春季特別展図録 縄文の祈り・弥生の心 ~森の神から稲作の神へ~』, 大阪府立弥生文化博物館, 1998年。
- 安田喜憲『気候と文明の盛衰』, 朝倉書店, 1992年。
- 山口譲治「弥生時代の木製農具-勧告新昌洞遺跡出土農具から-」, 『韓国古代文化の変遷と交渉』, 伊世英教授停年記念論叢刊行委員会, 2000年。
- 山田昌久「9章 木質遺物研究史」, 『木の考古学 出土木製品の用材データベース』海青社, 2012年。
- 農林水産省林業試験場木材部 編『世界の有用木材300種』, 1975年。

黒須 亜希子 (文化財保護課 文化財保護技師(埋蔵文化財担当))

別表 近畿地方で出土する木製品の用材一覧（針葉樹）

科	属	亜属、節	種	分布と生育環境	材の特徴	硬度	気乾比重	出土例	現在の用例
イチイ科	イチイ属		イチイ	北海道、本州、四国、九州の山岳地帯。耐陰性、耐寒性あり。	狂いが少ない。	硬	0.45～0.62		器具、細工物、彫刻、鉛筆。
	カヤ属		カヤ	本州中南部、四国、九州、朝鮮半島の暖帯林や山地。成長が遅い。	芳香あり。耐湿性あり。耐朽性高い。	硬	0.51	鍾、儀仗、衣笠、權、斧柄、弓、櫛、刀柄、杭、板材、棒材、炭化材。	基盤、桶、彫刻、建築材、船舶。
イチヨウ科	イチヨウ属		イチヨウ	日本、中国、朝鮮半島。成長が早い。	均質で狂いが少ない。	やや硬	0.55		基盤、算盤、俎、版木、彫刻、天井板、漆器。
イヌガヤ科	イヌガヤ属		イヌガヤ	岩手県～屋久島。耐陰性強い。多雪地帯に少なく、暖温帯上部に生育。	緻密で硬い。粘りがある。		0.51	儀仗、槌、鋤柄。	庭木。
コウヤマキ科	コウヤマキ属		コウヤマキ	本州中南部、四国、九州の山地。	油脂性の匂いあり。耐水性あり。割裂性高い。	並	0.42	田下駄、馬鞍、棺、槽、指物、板材。	建築材、施設材、土木材、船舶、桶。
スギ科	スギ属		スギ	本州北部～屋久島。	狂いが少ない。軽量軟質。耐水性低い。割裂性高い。	軟	0.38	鎌柄、田下駄、櫛、船、アカト、火鉢、白、井戸杵、腰掛、刺把頭、形代、琴、装飾具、楯、槽、礎板、まくら、梯子、さ、柱、杭、板材。	建築材、電柱、樽桶、割箸。
ヒノキ科	ヒノキ属		ヒノキ	本州中部～屋久島。	狂いが少ない。芳香あり。耐湿性、耐水性あり。	並	0.41～0.45	斧柄、鎌柄、鉈柄、鑿柄、槍鉋柄、鎌柄、鋸柄、鋤柄、田下駄、紡織具、權、アカトリ、作業台、腰掛、匙、杓子、鞘、蓋、槽、棺、形代、蹴放、礎板、梯子、柱、杭、板材、棒材。	寺社建築、調度、曲物容器。
			サワラ	本州北部～九州。飛騨、木曽に多い。	軽量軟質。耐湿性あり、割裂性高い。	並	0.34		建築材、器具材、桶、障子、襖。
	アスナロ属		アスナロ	北海道南部～九州。	芳香あり。やや軽量。耐湿性、耐水性あり。芯持材の保存性は高い。	並	0.37～0.52		建築材、土木材、船舶。
	ネズコ属		ネズコ	本州北部～中国、四国。中部山地に多い。	軽量軟質、割裂性高い。	並	0.3～0.42	板材。	戸、障子、箱、天井板、下駄、曲物。
	ネズミサン属		ネズミサン	東北以南の日当たりがよく乾燥した丘陵地。嫌湿性。成長が遅い。	芳香あり。耐湿性あり。耐久性、保存性高い。	硬	0.54		床柱、彫刻。
マキ科	マキ属		イヌマキ	関東～沖縄、台湾の暖地。防風、防水性高い。	臭気あり。枝や節が多い。耐湿性、耐水性あり。保存性、耐虫性高い。	やや硬	0.48～0.54	杭、部材。	建築材、土木材、器具材、桶。
マツ科	ツガ属		ツガ	本州南部～屋久島の中間温帯林。丘陵の尾根筋に多い。	木肌は荒い。乾燥は容易。割裂性大きい。	やや硬	0.51	付木、杭。	柱建築材、器具材、梱包材。
	トウヒ属		トウヒ	北海道、本州の中部山岳高地、九州の山地。	軟質。耐久性が低い。加工容易。割裂しやすい。	やや軟	0.5		弦楽器、調度、俎
	マツ属	単維管束亜属	ゴヨウマツ	北海道、本州、四国、九州の高地。	軽量軟質。	並	0.41～0.45		建築材、天井板、調度、漆器、腕、彫刻
		複維管束亜属（ニヨウマツ）	アカマツ	本州、四国、九州の温暖な内陸部。朝鮮半島、中国東北部。	土中で腐食しにくい。狂いが生じやすい。	やや硬	0.53	櫛、斧柄、釣瓶、堅杵、弓、柄杓、槽、杭、板材、棒材。	燃料材、建築材、土木材、松脂
			クロマツ	本州、四国、九州、朝鮮半島の島嶼。海岸線。	耐湿性あり。汚染、塩害に強い。	やや軟	0.57		燃料材、建築材、土木材、松脂。
	モミ属		モミ	秋田県～屋久島の温暖地、中間温帯林。	軟質軽量。狂いが生じやすい。	やや硬	0.44	琴、ヤス、腰掛、田下駄、槽、盤、指物、刀柄、矢板、杭、板材、棒材。	箱、卒塔婆、調度。

別表 近畿地方で出土する木製品の用材一覧（広葉樹）

科	属	亜属・節	種	分布と生育環境	材の特徴	硬度	気乾比重	出土例	現在の用例
アオギリ科	アオギリ属		アオギリ	沖縄～奄美大島では自生。本州の暖地、中国南部、東南アジア。			—		建築材、調度、楽器、薬品。
アケビ科	アケビ属		アケビ	日本全国。			—	縄、編物。	籠、工芸品、薬品。
アワブキ科	アワブキ属		アワブキ	本州、四国、九州の沢地、インド、中南米。			—		
イイギリ科	イイギリ属		イイギリ	本州以南、朝鮮半島、中国、台湾。			—		
	クスドイゲ属		クスドイゲ	西日本の沿岸部、島嶼。			—		
ウコギ科	ウコギ属		ウコギ	中国原産、東アジア。			—	部材。	食用、薬品。
			コシアブラ	北海道、本州、四国、九州。丘陵、山地の日当たりのよい斜面。			—		彫刻、刀の鞘。
	ウツギ属		ウツギ	北海道南部、本州、四国、九州。日当たりの良い崖地。			—		食用、薬品。
	タカノツメ属		タカノツメ	北海道南部、本州、四国、九州の丘陵地。			—		炭、箱、箸、爪楊枝、経木、マッチの軸
	タラノキ属		タラノキ	日本全国。日当たりの良い山野。伐採跡地に出現する。			—	杭。	食用。薬品。
	ハリギリ属		ハリギリ	全国、朝鮮半島、中国の山地。肥えた地に自生する。	軽い。加工容易。保存性低い。	軟	0.46		下駄。食用。建材、家具、楽器、仏壇。
	ヤツデ科		ヤツデ	関東以西。海岸付近の森林。			—		庭木、薬品。
ウルシ科	ウルシ属		ウルシ	日本全国、朝鮮半島、中国。東アジア原産。			—		塗料、木蠟。
			ヌルデ	日本全国。伐採跡地に出現する。			—		塗料。薬品。彫刻、木札、木箱。
			ハゼノキ	東南アジア～東アジアの暖地。			—		木蠟、工芸品、細工物、和弓。
			ヤマウルシ	日本全国、朝鮮半島、中国。			—		塗料、木蠟。
			ヤマハゼ	関東以西、四国、九州、沖縄、朝鮮半島、中国、台湾。			—		
エゴノキ科	エゴノキ属		エゴノキ	日本全国。	木肌は緻密。粘りがある。		—	杭。	将棋の駒。洗浄剤。
	アサガラ属		アサガラ	関西以西の山地、中国、東南アジア。			—		
カエデ科	カエデ属		イタヤカエデ	日本全国。良材は東北部と北海道。	狂いが生じやすい。乾燥しにくい。	硬	0.63	剣柄。	楽器、家具。
			イロハモミジ	本州以南の低山。			—		
			ヤマモミジ	北海道、島根県以東の日本海側。多雪地帯。			—		錘、鉢。
カキノキ科	カキノキ属		カキノキ ヤマガキ	西日本に自生。	加工困難。割裂しやすい。	硬	0.56	土木材、棒材、杭。	和家具、建材、茶道具、塗料、防錆剤。
カツラ科	カツラ属		カツラ	日本全国。	木肌は密。加工容易。やや狂いが生じやすい。	やや軟	0.45	柱。	建築材、彫刻、机、椅子、将棋盤。
カバノキ科	アサダ属		アサダ	北海道中南部～九州南部、中国、朝鮮半島。	ねじれが生じやすい。乾燥に時間がかかる。輻輳加工に向く。釘抜けにひくい。腐食、摩滅に強い。	やや硬	0.66		柄、木管、靴の木型、床材。
	カバノキ属		シラカンバ	本州中部、東北以北、中国、朝鮮半島、シベリア。	狂いが生じにくい。曲げに強い。耐久性、保存性は低い。寿命が短くあまり大きくならない。	並	0.56		内装、街路樹。
			ダケカンバ	北海道、本州の高地。日当たりの良い場所。	狂いが生じにくい。耐水性がある。加工容易。粘りがある。磨耗に非常に強い。腐食に弱い。	やや硬	0.65		家具材、内装、指物。
			ミズメアスサ	本州～九州の深山。	木肌は緻密。割裂性小さい。	硬	0.65		家具、器具材、床板、機械材。
	クマシテ属	イヌシテ節	イヌシテ	本州、四国、九州、朝鮮半島、中国。	弾力性がある。大木にはならない。	やや硬	0.7～0.8		農具の柄、挽物、薪炭、椎茸の原木。
	クマシテ		本州、四国、九州、朝鮮半島、中国。		硬	—		家具、鍵在、農具の柄。	
	ハシバミ属		ハシバミ	日本全国、朝鮮半島、ロシア沿岸部、東アジア北東部。			—		
	ハンノキ属	ハンノキ亜属	ハンノキ	日本全国、朝鮮半島、中国。山野の湿地に自生。	加工やや容易。乾燥はやや困難。割裂性低い。	やや硬	0.47～0.53	棧、杭。	器具算、建材、土木材、鉛筆、薪炭。

黒須 亜希子 『近畿における木製品の用材選択』

科	属	亜属・節	種	分布と生育環境	材の特徴	硬度	気乾比重	出土例	現在の用例	
キブシ科	キブシ属		キブシ	北海道～九州、小笠原諸島、山地の明るい場所。荒地に進出する。生育環境が広い。			—			
クスノキ科	ニッケイ属		クスノキ	関東以南、西日本、台湾、中国。	木肌は緻密。加工容易。耐久性、保存性高い。乾燥時に狂いが生じやすい。虫害を防ぐ。	やや軟	0.52	船、アカトリ、白、泥除、槽、蓋、杭、板材、棒材。	家具（樟脳）、彫刻。	
			ヤブニッケイ	福島県以南～沖縄、中国。海岸から低地の森林に生育。シイ、タブ属の二次林種。			—		建材、器具材、庭木。	
	クロモジ属		アブラチャン	本州～九州。				—		薪炭。輪かんじき。
			カナクギノキ	千葉県以西～九州。朝鮮半島、中国の暖帯。丘陵、山地。				—		
			クロモジ	本州～九州。低山、疎林。				—		楊枝。化粧品、薬品。
		ダンコウバイ	新潟県以南～九州の山地。中国、朝鮮半島。				—		庭木。	
	シロダモ属	シロダモ	山形県以南～九州、南西諸島。朝鮮半島、中国、台湾。				—	錘、斧柄、杭。	防風林。	
タブノキ属	タブノキ	本州以南。瀬戸内海地方を除く海に面した地域。朝鮮半島南部、台湾、中国。	乾燥は困難。切削、加工が困難。摩耗に強い。耐久性に優れる。腐食に耐性あり。	硬	0.65	割物桶、杭、棒材。	家具、内装材。樹皮から染料が取れる。			
クマツツラ科	クサギ属	クサギ	北海道～沖縄。台湾、中国。白当たりの良い原野。				—		食用、染料。	
	ムラサキシキブ属	ムラサキシキブ	北海道～沖縄。朝鮮半島、台湾。低山の森林。				—		庭木。	
グミ科	グミ属	アキグミ ナツグミ	北海道道央以南～九州。白当たりの良い河原、林道。瘦地にも生育。				—			
クルミ科	クルミ属	オニグルミ	北海道～九州。樺太。	加工容易。粘りがある。狂いが生じにくい。大径木にならない。	並	0.53	杭、部材。	家具、建材、彫刻、器具材。		
	サワグルミ属	サワグルミ	東北～関東の山林。	軽い。加工容易。腐食しやすい。磨耗に強い。	やや軟	0.45		下駄、引出し、マッチの軸、屋根材		
	ノグルミ属	ノグルミ	東海以西～九州。中国、朝鮮半島、台湾。			—	工具柄。			
クロウメモドキ科	ケンボナシ属	ケンボナシ	北海道の一部、本州、四国、九州。中国、朝鮮半島。	反りが出やすい。割裂性大きい。乾燥すると狂いが少ない。	並	0.61	扉。	床柱、家具材、内装、楽器。		
クワ科	イチジク属		イタバिकासラ	福島県以南～九州、朝鮮半島、中国。崖、森			—			
			イチジク	宮城県以南～九州。			—			
	イヌビワ属	イヌビワ	関西以西～沖縄。海岸線付近の山地。				—			
	カジノキ属		カジノキ	日本。中国。				—		
			コウゾ	日本。中国、東南アジア。山間部の傾斜地。				—		繊維、紙。
	クワ属	ヤマグワ	全国。良材は伊豆七島の御蔵島、三宅島。	熱伝導率が低い。曲げ適正が高い。耐久性高い。	硬	0.62	錘、杓子、机脚、柱、杭、矢板、板材、棒材。	茶室、長火鉢、ちゃぶ台。木魚や指物、湯飲茶碗。		
ハリグワ属	ハリグワ	日本全国。中国、朝鮮半島原産。				—		薬品、製紙。		
ゴマノハグサ科	キリ属	キリ	北海道南部以南。	非常に軽い。加工容易。強度低い。耐湿性がある。狂いが少ない。割裂性小さい。発火しにくい。		0.19～0.30		家具、下駄、楽器、箱、金庫。		
スイカズラ科	ガマズミ属		ガマズミ	日本。明るい山地、丘陵地。			—			
			ゴマギ	関東以西の太平洋側、四国、九州、沖縄。低地、山地のやや湿った場所。			—			
			サンゴジュ	千葉県以西～沖縄。朝鮮半島、台湾、東南アジア。				—	庭木。防火林。漁。	
			ヤブデマリ	本州～九州。湿った林縁に自生。				—		
	ニワトコ属	ニワトコ	本州～沖縄。朝鮮半島、中国。山野の林縁、湿った白当たりの良い場所に自生。				—	神事、食用、薬品。		
シキミ科	シキミ属	シキミ	宮城県～沖縄。済州島、台湾、中国。山地に自生。				—	鎌身、杭。	仏事。	
センダン科	センダン属	センダン	本州の暖地、四国、九州、南西諸島。	加工容易。含水率、保水率高い。乾燥しにくい。狂いが生じやすい。	やや軟	0.58		装飾建材、家具、木魚、琵琶の胴、下駄。		

黒須 亜希子 『近畿における木製品の用材選択』

科	属	亜属・節	種	分布と生育環境	材の特徴	硬度	気乾比重	出土例	現在の用例	
ツゲ科	ツゲ属		ツゲ	山形・宮城以南の本州と四国,九州。	強度がある。木肌は緻密。狂いが生じにくい。成長が遅い。	硬	0.71		櫛, 印鑑, 将棋の駒, 彫刻, 定規, 測量用具。	
ツツジ科	スノキ属		シャシャンボ	本州西部~九州, 朝鮮半島, 中国。乾燥地に自生。	大径木がある。		—	垂木, 火鋸臼, 火鋸杵, 杭		
	ツツジ属		ヤマツツジ	北海道南部~九州。低山の林縁, 疎林, 日当たりの良い尾根, 草原に野生。			—			
	ネジキ属		ネジキ	本州~九州。山地, 日当たりの良い林。酸性地。			—		庭木。	
ツバキ科	サカキ属		サカキ	茨城県以西, 四国, 九州, 濟州島, 台湾, 中国。			—	斧柄, 背負子, 網杵, 形代, 竪杵, 柱, 梯子, 板材, 杭, 土木材。	神事。	
	ツバキ属		ヤブツバキ	青森県~沖縄県, 台湾, 中国。	小口割れが少ない。乾燥が容易。耐久性高い。	硬	0.81	錘, 背負子, 槌, 竪杵, 形代, 板材, 棒材, 杭。	漆器, 彫刻, 印鑑, 道具の柄。	
	ナツツバキ属		ヒメシャラ	福島県伊豆。朝鮮半島南部の山地。	強靱。粘りがある。耐久性高い。乾燥が困難。狂いが生じやすい。	非常に硬	—		農耕具の柄, 床柱。	
	ヒサカキ属		ヒサカキ	本州~九州。森林。	臭気あり。		—	梯子。	神事。	
トウダイグサ科	アカメガシワ属		アカメガシワ	岩手県~九州, 台湾, 中国。山野, 川縁, 空地に自生。二次林種。		軟	—	棒材。	床柱, 下駄, 薪炭, 薬剤。	
	シラキ属		シラキ				—	棒材。		
トチノキ科	トチノキ属		トチノキ	北海道, 本州, 四国, 中国。	やや軽い。加工容易。乾燥が不十分だと狂いやすい。	並	0.53		内装, 床柱, 家具, バイオリン。	
ナシ亜科	リング属		オオウラジロノキ	本州~九州。山地の乾燥した尾根。			—		危惧材, 家具材, 染料。	
ニガキ科	ニガキ属		ニガキ	北海道~九州, 中国, ヒマラヤ。	やや粘りがある。加工容易。	やや硬	0.58		危惧材, 寄木細工。薬品。	
ニシキギ科	ツルウメモドキ属		ツルウメモドキ	北海道~沖縄。東アジア。日当たりの良い山野, 林。			—		装飾。	
	ニシキギ属		ニシキギ	日本。中国。林野に自生。			—		庭木, 盆栽。	
	マユミ		マユミ	日本。中国。林野に自生。	よく曲がる。		—	弓。	和紙, 印鑑, 櫛, 食用。	
ニレ科	エノキ属		エノキ	本州, 四国, 九州, 朝鮮半島, 中国。	強度はやや低い。狂いが生じやすい。	やや硬	0.6~0.75	編台, 箱, 杭, 板材, 炭化材。	建材, 器具材, 薪炭。	
	ケヤキ属		ケヤキ	北海道を除く, 全国。	耐湿性, 耐久性高い。加工は可能。狂いが落ち着くまでに時間がかかる。	非常に硬	0.58	板材, 棒材, 杭。	建築材(寺院), 和家具。	
	ニレ属		アキニレ ハルニレ	北海道, 東北~関東の山岳地帯。	乾燥がやや困難。加工はやや困難。割れにくい。曲げ加工に向く。磨耗に弱い。腐食に強い。	やや硬	0.63	船, 槽, 棒材。	太鼓の胴, 家具, 内装。	
	オヒョウ		オヒョウ	日本, 東北アジア。北海道に多い。			—	布。	危惧材, 薪炭, 繊維。	
ムクノキ属	ムクノキ		ムクノキ	本州, 四国, 朝鮮半島, 中国。	粘りがある。耐久性は低い。	並	0.67	鋤柄, 棒材, 杭。	漆器柄, 器具材, 工具の柄, 天秤棒。	
	ハイノキ属	サワフタギ節	サワフタギ	北海道, 本州, 四国, 九州, 朝鮮半島, 中国。山地の沢等の湿地。			—			
ハイノキ科	ハイノキ属	ハイノキ節	ハイノキ	近畿以西, 四国, 九州。南限は屋久島。暖地の山地に群生。		硬	—		庭木, 生垣, 器具。	
バラ科	カナメモチ属		カナメモチ	中部以南の暖地。		硬	—	木桶。		
	カマツカ属		カマツカ	本州, 四国, 九州の低山や丘陵地帯。		硬	—		庭木, 公園木。	
	ザイフリボク属		ザイフリボク	本州中部以南, 四国, 九州。			—			
	サクラ属	ウメ		ウメ	日本, 台湾, 中国, 韓国			—		庭木, 盆栽, 食用。
		バクチノキ		バクチノキ	関東以西, 四国, 九州, 沖縄の暖地。			—	櫛, 船, 板材, 土木材, 杭, 割物桶, 結束具, 矢板, 衣笠, 礎板, 矢柄。	薬用。
		モモ		モモ	北海道南部以南, 降水量が少ない盆地。	割れにくい。		—		箸, 食用, 鑑賞。
	ヤマザクラ		ヤマザクラ	関東以南の暖地。朝鮮半島。	反り, 狂いが少ない。粘りがある。耐水性が高い。虫害に強い。	硬	0.60		高級家具, 楽器, 漆器, 道具の柄, 仏壇。	
シモツケ属		シモツケ	北海道以南, 朝鮮半島, 中国の日当たりの良い山野。耐寒性が高い。			—		庭木。		
シャリンバイ属		シャリンバイ	日本, 韓国, 台湾の海岸付近。		硬	—		木槌, 庭木, 公園樹, 染料, 薬用。		

科	属	亜属・節	種	分布と生育環境	材の特徴	硬度	気乾比重	出土例	現在の用例	
バラ科	ナナカマド属		ナナカマド	北海道、本州、四国、九州の山地～亜高山帯。	燃えやすい		—		備長炭，食用，	
	バラ属		ノイバラ	北海道，本州，四国，九州の山野。	よく萌芽する。		—		薬用，化粧品，接木。	
フサザクラ科	フサザクラ属		フサザクラ	本州，九州，四国。日当たりの良い傾斜地。			—			
ブナ科	クリ属	アカガシ亜属	クリ	北海道南部，石狩以南。	乾燥は難しい。耐久性，耐水性が高い。虫害に強い。	硬	0.60	鎌柄，矛柄柱，杭，板材。	建材，家具材。机の天板。	
			アカガシ	新潟以南の暖地。朝鮮南部，台湾，中国。	加工は非常に困難。乾燥が難しい。乾燥後は狂いが少ない。腐食に強い。磨耗に強い。虫害をうけやすい。	非常に硬	0.89	編台，榿，梯子，柱，斧柄，楔，木槌，鎌身，鋸身，鋸柄，鋸，鋸，皿，槽，匙。	工具の柄，木刀，カンナの台，敷居の溝，船（船縁，舵，櫂）。	
			アラカシ				—			
			イチイガシ				0.75			
			ウバメガシ				—			
			ハナガシ				—			
	シラカシ	関東以南の暖地。防風性，防火性がある。	加工は非常に困難。乾燥が難しい。腐食に強い。磨耗に強い。虫害をうけやすい。	硬	0.87		工具の柄，木刀，カンナの台，櫓木			
	コナラ属	コナラ亜属	コナラ節	カシワ	日本全国，朝鮮半島，台湾，中国。火山地帯，海岸，瘠地，乾燥地。			—		防風林。
				コナラ	北海道～九州，朝鮮半島，中国。			0.78	鋸身，錘，礎板，槌，板材，杭。	薪炭，器具材。
				ナラガシワ	岩手県以南～九州，朝鮮半島，中国，東南アジア。			—		薪炭，椎茸の原木
				ミスナラ（ナラ）	日本全国。良材は北海道北側，秋田。	裂けにくい。加工が困難。	硬	0.67		家具。ウイスキー醸造樽。
				アベマキ	関東以西～四国，九州。山地，雑木林。			—		薪炭，櫓木，コルク。
	クヌギ	岩手県以南。低山地，平地。	成長が早い。			硬	0.86	斧柄，槌，竪杵，木包丁，刀柄，板材，杭，棒材。	建築材，器具材，車両，船舶，薪炭，櫓木，薬品。	
	シイ属		スダジイ	福島県以西～与那国島。済州島。暖地。				0.57	垂木，梁，まくら，板材，杭，矢板，衣笠，榿，柱，釣瓶，鋸身，矢柄。	薪炭，櫓木，街路樹，庭木，染料。
			ツブラジイ	本州中部～四国，九州。朝鮮半島。海岸付近の暖地。	加工はやや困難。狂いが生じやすい。	やや硬	0.52～0.61		器具材，建材。枕木，薪炭。椎茸の原木。	
			タモ	北海道～滋賀県。	乾燥が困難。反発力がある。	硬	0.65		バット，ドア枠，階段，内装，床材	
	ブナ属		ブナ	北海道南部～熊本県。	保水力が高い。粘りがある。弾力性があり曲げに強い。乾燥は難しい。ねじれや狂いが生じやすい。	硬	0.50～0.70	柱，杭，漆器碗。	家具材（曲木家具），玩具。	
マテバシイ属		マテバシイ	関東以南，沖縄。	反り・ねじれが生じやすい。加工しやすい。腐に弱い。磨耗に強い。	硬	0.61	杭	家具，建材，櫓木，薪炭。		
マタタビ科	マタタビ属		マタタビ	北海道～九州，千島列島，朝鮮半島。山地の林縁。			—	建築材，家具，危惧材，薪炭，洗剤。		
マメ科	イヌエンジュ属		イヌエンジュ	中国原産。日本国中に植樹。	強靱で折れにくく，割れにくい。腐食しにくい。	やや硬	0.63		框，床柱，家具，小道具，彫刻。	
	サイカチ属		サイカチ	本州，四国，九州。山野，川原。			—	杭		
	クララ属		エンジュ	中国原産。日本では生育が未確認。			—			
	ネムノキ属		ネムノキ	本州～沖縄。朝鮮半島，中国，台湾，南アジア。	加工しやすい。	並	0.52		指物，器具材，彫刻。	
	フジ属		フジ	本州，四国，九州。低山地，平地。			—			
	フジキ属		フジキ	福島県以南～四国。	加工が困難。	硬	0.7		器具材，建材，細工物。	
コクノキ		コクノキ	関東以西～九州。温暖な山地，適度な湿地。			—				
マンサク科	イスノキ属		イスノキ	本州南部，四国，九州，沖縄。台湾，済州島。	肌目は緻密。加工，乾燥は困難。耐久性に優れる。割れにくい。	非常に硬	0.89		器具材，床板，機械，三味線，木刀，枕木，薪炭。	
マンサク科	マンサク属		マンサク	本州の太平洋側～九州。山林。			—		庭木。	
ミカン科	キハダ属		キハダ	全国。良材は北海道北部。	やや軽い。加工容易。やや腐食しやすい。摩滅に弱い。耐水性がある。	並	0.48		家具，床柱，椀，盆。	
	サンショウ属		サンショウ	北海道～屋久島，中国，朝鮮半島。			—	棒材	香辛料，食用。	
ミズキ科	アオキ属		アオキ	東北南部～沖縄，ヒマラヤ，中国南部。森林。半日陰，耐寒性あり。			—		庭木，薬品。	
	ミズキ属		クマノミズキ	本州，四国，九州，朝鮮半島，台湾，中国，ヒマラヤ。山地。			—			

黒須 亜希子 『近畿における木製品の用材選択』

科	属	亜属・節	種	分布と生育環境	材の特徴	硬度	気乾比重	出土例	現在の用例
ミズキ科	ミズキ属		ヤマボウシ	本州, 四国, 九州, 朝鮮半島, 中国。			—		街路樹, 庭木。
ムクロジ科	ムクロジ属		ムクロジ	茨城県以西, 南アジア, 東アジア, 東南アジア。			—	杭, 棒材, 装飾部材。	洗剤。
モクセイ科	イボタノキ属		イボタノキ	日本全国。明るしい山地。			—		楊枝, 器具の柄, 薪炭。
	トネリコ属		アオダモ	北海道～九州。朝鮮半島。	加工しやすい。曲げ加工が可能。成長せず大径木が少ない。	硬	0.71	炭化材。	バット, スキー板, 楽器。
モクセイ科	トネリコ属		トネリコ	本州中部以北。	粘りが在り, 曲げに強い。強靱。	硬	0.76	梯子, 杭。	バット, ラケット, 漆器柄, プロペラ。
	ヒトツバタコ属		ヒトツバタコ	対馬, 木曾川周辺, 中国, 台湾, 朝鮮半島。			—		鉢植, 花壇。
モクレン科	モクレン属		ヒイラギ	関東以西～沖縄, 台湾, 山地。	衝撃に強い。	硬	—		盆栽, 生垣。工具の柄。細工物, 印。
モクレン科	モクレン属		ホオノキ	全国。良材は北海道東部, 関東～東北の山間部。	加工が容易。金属が錆びにくい。乾燥後の狂いが少ない。	並	0.48	簀, 槽, 棒材。	刀の鞘, 俎, 定規。
モチノキ科	モチノキ属		アオハダ	北海道～九州。朝鮮半島, 中国南部。	木肌は緻密。加工が容易。狂いが生じにくい。	やや硬	0.6		危惧材, 輻輳細工, 寄木細工, 象嵌。
			モチノキ	本州～南西諸島。中国, 台湾。暖地の海辺。塩害に強い。			—		トリモチ, 神事。
ヤシ科				熱帯～温帯。			—		建築材, 工芸品。
ヤブコウジ科	ツルマンリョウ属		タイミンタチバナ	千葉県以西～琉球列島。暖かい海岸林。中国, 台湾, 東南アジア。			—		駆除剤, 染料, 薪炭。
ヤナギ科	ヤナギ属		ヤナギ	日本全国, 北半球。湿地, 河川敷。			—	柱, 土木材, 杭, 甲, 自在鉤。	箱, 土木材。
	ヤマナラシ属		ハコヤナギ(ヤマナラシ)	日本全国。山地。			—		街路樹, マッチの軸, 紙, 経木, 割箸, 箱。
			ドロノキ	北海道, 本州中部以北, 樺太, 千島列島, 朝鮮半島, シベリア, 中国。	軽い。加工容易。木肌は粗い。	軟	0.42		街路樹, 食用。
ヤマモモ科	ヤマモモ属		ヤマモモ	関東以南, 中国, 台湾。低地, 山地, 海岸, 尾根。			—		
ユキノシタ科	アジサイ属		ノリウツギ	北海道～九州。山地の林縁。			—		
ユズリハ科	ユズリハ属		ユズリハ	福島県以南～沖縄, 朝鮮半島, 中国, 東アジア。暖かい山地。			—	背負子, 棒材, 杭。	
リョウブ科	リョウブ属		リョウブ	北海道～九州, 済州島。			—	杭	